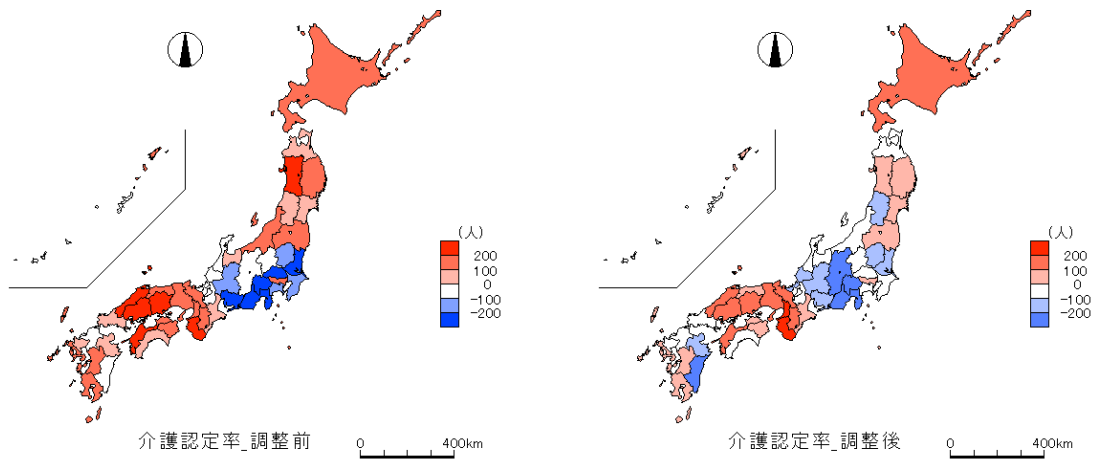


高齢化の度合を差し引いて

介護の地域差を見る



牛澤 賢二 梅田 佳夫 [著]

バイオフィリア研究所 [発行]

はじめに

家庭内で家族だけで介護するやり方から社会全体で支えることを目標として介護保険制度ができてから、この4月（2020年）で20年になりました。この間、高齢者の数・介護を必要とする人の数が激増し、2019年の総費用は11兆円を超えました。5年後の2025年には団塊世代の人たちがすべて後期高齢者になるといういわゆる2025年問題を迎えます。このようなことから介護保険制度の維持を危ぶむ声が多くなりました。益々高齢者が増える中で、今後も20年30年とこの制度を維持できるのでしょうか。

本書では、介護に関する地域差の“見える化”を試みました。介護だけではなく医療や生活保護など他の社会保障に関する指標の地域差についても多くの報告があります。でも真剣に検討がなされることは少ないように感じます。何故でしょうか。たぶんこれといった原因が分からないからです。いろいろな分析が試みられるものの、解決策が立てられるような決定的な要因がなかなか提案できないからなのかもしれません。また一般的に具体的な地域差が見えるような形で知られていないからかもしれません。

そもそも何故地域差を問題にしようとしているのでしょうか。介護保険の場合は費用の半分以上が税金でまかなわれています。やはり公平公正な方が望ましいと言えます。もし生き生き高齢者が多い地域があったら、そこを参考にするのがベターです。

介護に関して調べると、まず大きな地域差の要因は、地域によって高齢化の度合いが違います。この問題は解決のしようがありません。自分や家族のこと（だけではもちろんありませんが）を考えれば、高齢者は大事にされなければなりません（もちろん高齢者だけではありませんが）。他の人の助けを受けないでいつまでも元気でいたい、いてほしいと思います。でもいろいろな資料をみると実にたくさんの要因が地域差の原因であるといって分析されています。例えば「気象条件」などです。暖かい地域であるとか寒い地域であるとか。これが原因だとしても、考えなくてもこれは人間の手で解決できるものではありません。そういう解決できない要因をたくさん含めて複雑な分析をしてもどうにもなりません。

本書では地域差の実態を、高齢化の度合いを差し引いて、それでもなお残る地域差を“見える化”しようと試みました。統計学で昔からよく使われている数量化理論Ⅰ類という日本生まれの手法（林知己夫さんという著名な統計学の先生が開発しました）を利用しました。この手法を使って、ただ高齢化の度合いを差し引いているだけなので難しくはないです。割り算するよりは分かり易いと思います。この部分は解説してありますが、飛ばしてもかまいません。とりあえずは地域差の実態を見てみてください（3章と4章）。高齢化の度合いだけでは説明できない大きな地域差が残ります。都道府県の間でも、ひとつの都道府県の中の市町村の間でも大きな地域差があります。市町村間での地域差ということになると「気象」要因などは全く無力です。

地域差の原因として高齢化の度合いのほかに、地域の高齢者の数も含めました。地域の規模要因としての財政的・政策的な係わりも地域差の原因になり得ると考えたからです。それ以外は含めていません。他の原因は地域差の実態を見て、みんなで考え、みんなで解決策を探ってみよう、というのが本書の後のみんなの課題です。努力目標と言ってもいいと思います。他者のことが具

体的に見えるようになると頑張れるかもしれません。

本書の構成は以下のようです。

第1章では分析の目的や方法と分析対象のデータについて説明しています。第2章では介護認定率や給付費と保険料のデータに対して数量化I類を使って分析した結果の概要を述べています。そして第3章と4章で地域差の実態を視覚化して説明しています。第3章は都道府県間の地域差を、モデルによって調整する前と後で比較しながら説明します。高齢化の度合の効き目が分かります。第4章では全国から特徴的な10府県を選び、その中での全保険者（≡市町村）間の地域差を見ています。また、2020年から2030年への高齢化度の変化も比較して見ています。47都道府県すべての結果は許されたページ数の範囲では掲載できませんでした。そのためのテンプレートを付録として載せましたので、是非「我がまち」の所在する都道府県の分析を自ら試みてください。第5章はまとめとして簡単に本書のポイントを整理しました。

本書を著す前にいくつかの学会や研究会などで関連する話題について発表し議論する機会がありました。その後、介護関連のデータをできるだけ新しいもの（2019年10月）を使用して再分析し、今回の報告になりました。この間、株式会社シード・プランニング、バイオフィリア研究所の方々をはじめ多くの関係者にお世話になりました。ここに深く感謝の意を表します。

2020年5月

著者

目次

はじめに

1 章	本書の目的と分析方法	1
1.1	目的と用いたデータ	1
1.2	高齢化の度合と地域の規模に関する指標	1
1.3	分析の方法	2
1.4	分析の進め方と本書の構成	3
1.5	分析対象データの概要	3
2 章	数量化 I 類モデルと高齢化度の影響	9
2.1	介護認知率のモデル	9
2.2	介護給付費と保険料のモデル	16
2.3	高齢化度の影響のまとめ	20
3 章	都道府県の差を見る	21
3.1	介護認定率の地域差を見る	21
3.2	介護給付費と保険料の地域差を見る	24
4 章	主な府県における市町村の間の地域差を見る	28
4.1	青森県	30
4.2	山梨県	36
4.3	静岡県	42
4.4	大分県	48
4.5	鳥取県	54
4.6	和歌山県	60
4.7	大阪府	66
4.8	愛媛県	72
4.9	富山県	78
4.10	神奈川県	84
5 章	まとめ	91
付録	我がまちの介護の実態をしらべる	93
	参考資料	99

コラム 1 箱ひげ図の見方 8

コラム 2 数量化 I 類の分析結果の見方 15